

歴史館だより

題字 最上家第47代当主 最上公義氏



企画展「掘る!!」～山形城三の丸ワールド～ より「黒織部杓茶碗」

- ◆ 最上家伝来の宝刀「鬼切丸」の謎
- ◆ 史料紹介 仮称『最上義光注連歌新式』一冊
- ◆ 歴史随想 「折り紙に想う」
- ◆ 俳句 「古戦場の村」
- ◆ 参加者の声 「最上義光歴史館の講座を受けて」

No.13

2006年3月発行

最上義光歴史館

最上家伝来の宝刀「鬼切丸」の謎

山形市文化振興課長
山形県文化財保護協会専門員

布施 幸一

『太平記』に見る「鬼切」
— その行方と最上家への経路 —

源氏重代の宝刀の一つ鬼切。その由緒については『太平記』の記すところであり、これが最上家伝来の「鬼切丸」に該当するものとされている。

同書によると、越前藤島城で自害した新田義貞(一三〇一〜一三八)の首級と佩いていた鬼切・鬼丸の太刀二振り、斯波尾張守高経(一三〇五〜一六七)へ献じたのは、越中住人氏家伊賀守重国であった。重国は当時、斯波兼頼(一三一六〜一三七九)の幕下として、越前戦線に参戦していたという(『山形市史』上巻)。

こうして得た鬼切は、斯波高経の手元に留め置かれたようだ。一方の鬼丸は、足利将軍家へ渡ったと推測される。前者がその後、どのような道筋を経て最上家の祖の兼頼に渡ったのか。この点については謎であるが、

ここでは大まかに二つの経路を考えたい。

一つは伯父の高経から直接兼頼への道筋であり、もう一つは高経から父伊予守家兼(一三〇八〜一五六)をとおして、兼頼へという道筋が想定される。いずれにしても、これら二つの経路に、前に触れた氏家重国の働きが関与していたと見たいのである。そのことをとおして、兼頼に渡る蓋然性はあるだろう。

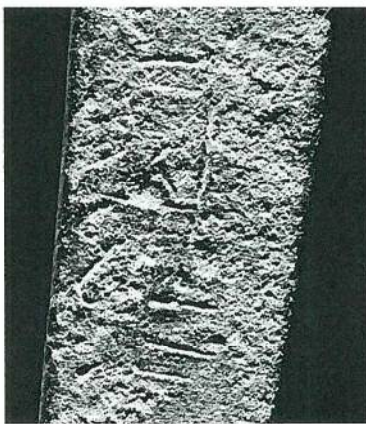
他には次のような理由も想定される。斯波高経のもとにあった鬼切は、斯波家兼が奥州管領(探題)として下向するに当たり、餞として高経から家兼に譲られた。先ずはそう仮定する。そして延文元年(一三五六)、家兼の死の直後、鬼切は嫡男の直持(大崎殿)には渡らずに、出羽大将として山形に赴く、次男の兼頼に与えられたのではあるまいか。

以上が、最上家への鬼切丸伝来の始まりである。この移動経路についての確証は何も無いが、新田義貞が自害時に佩いていた鬼切と号する

太刀は、いつの頃からか最上家重代の家宝として大切に守り伝えられてきた。江戸時代に入ると、この太刀は先ず寛文中(一六六一〜一七三)に時の老中たちの所望により、次いで享保十七年(一七三二)には八代将軍吉宗の命により、それぞれ上覧に供されている。さらに明治の初年には、天皇の勅覧にも供されるほどの由緒ある太刀であった。

「鬼切丸」と
名物「童子切」「鬼丸」について

この鬼切の作者は、『太平記』の記



「安」の字が「国」の字に改竄された鬼切

載のとおり、作風上からも明らかに伯耆国(鳥取県)安綱と見なされる。彼は平安時代後期、すなわち後三年の役(一〇八三〜一〇八七)終了後あたりに鍛刀した刀工と推定されている。

しかし、この太刀の銘をよく見ると「國綱」になっている。実は安綱の安の字が、意図的に国の字に改竄されているのだ。これは鬼切が何らかの理由により、安綱銘では不都合が最上家に生じたことを物語っている。では、いったいなぜ、そのようなことがなされたのであろうか。また、その時期はいつであらうか。これまた大きな謎である。

ズバリ結論を言えば、その原因は源氏重代の宝刀鬼切・鬼丸の説話と、これから述べる童子切安綱(現国宝)や鬼丸国綱(現御物)の出現と、無関係ではないと思われる。すなわち、重代の名刀や名物の持つ重みと、それに該当する刀工を意識し過ぎた結果の所産であると感じてほば間違いないであろう。

さらに付言すると、鬼切を江戸時代に至って鬼切丸と呼ぶようになったことさえも、単に自然発生的に元来の称号に接尾語として道具の愛称の「丸」を付したのではなく、鬼切と

鬼丸の呼称を半ば意図的に組み合わせ、銘の改竄と関連させたと考えられることは穿ち過ぎであろうか。

さてここで、鬼切の他に、伯耆安綱の手による童子切という太刀の存在について触れることにする。これは筆者が経眼した数振りの安綱中では群を抜く名刀であり、日本刀の王者としての貫禄が十分である。

伝説によると、この太刀は源頼光が、大江山の酒類童子を斬ったときに佩いていたもの。童子切の号はそのことによるという。斯界の通説では、この太刀は室町時代以来、鬼丸国綱とともに天下五剣の内に数えられ、足利將軍家に伝来し名高かつたとなつてゐる。だが、管見の限り、二振りとも桃山時代（一五八五～一六〇〇）を遡る文献史料を見ない。一方現存する鬼丸についてはどうか。この太刀は、実は北条時頼（二二二七～六三）が、京の粟田口国綱を鎌倉に呼び寄せ、作刀させたものである。国綱の二字銘がしっかりと切つてある。ちなみに、国綱は建長（二二四九～五五）頃の刀工と伝えられている。

「鬼切丸」謎解きの私見

童子切と鬼丸が名刀として広く知られるのは、やはり桃山時代からで

あると言つていいだろう。鬼丸についてはひとまず措くとして、童子切について考えてみよう。

憶測を逞しくすればこうである。秀吉が権力に任せ名刀を蒐集していく過程で、類いまれな安綱の太刀を入手した。それに、当時有力な鑑識家であつた本阿弥光徳が関与し、童子切という新たな名物を誕生させたのではなからうか。その伝説の基になつたのは、『太平記』の鬼切伝説の刀工安綱であり、それに世上に流布していた大江山酒類童子伝説などが加味されたのではあるまいか。

最上義光の時代は、すなわち太閤秀吉の時代である。その頃には少なくとも、名刀や名物刀剣の存在が、大名の間でしだいに知れ渡つていたと思われる。正宗や栗田口吉光を始めとして、名刀Ⅱ著名工という概念が定着してくると、当然のことながら、大名や武将の多くは著名工の作刀を贈答品として、あるいは家宝として意識せざるを得なくなつた。

このような状況下で、前代から選定のための一定の評価基準が成立していったことが、いくつもの史料によつて知られる。それらの中には、先に挙げた正宗や吉光などとともに、国綱の名はあるが、安綱の名を見出すことができない。希少価値があり且つ優秀な作品の一つとして、国綱

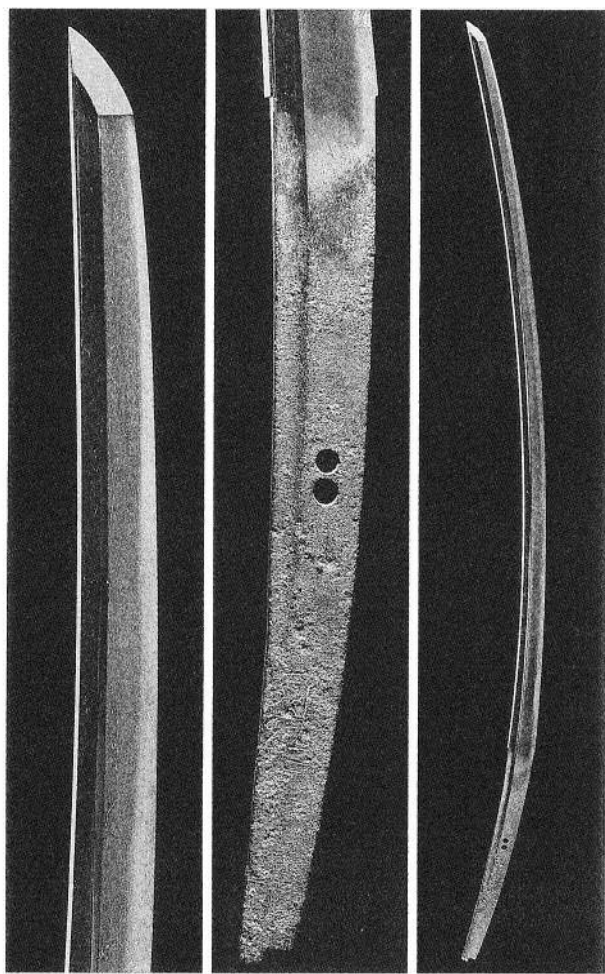
が選定されているのである。最上家では、先ずはこの辺りに敏感に反応したのではなからうか。これが銘の改竄理由の一つである。

一方、これとは別に、童子切という名物が、桃山期から江戸初期にかけて世に知られるようになる。穿つた見方をすれば、最上家において鬼切安綱では気後れを感じ、ならば国綱名に改竄しようということになつた。そして、この事件とほぼ時を同じくして、敢えて鬼切丸と呼称し、鬼丸国綱に紛れるような「鬼切丸国綱」を創出したのではなからうか。

傍から見れば軽拳とも思える銘の改ざんの背景には、やはり童子切安

綱や鬼丸国綱の存在が、影響したことは否定できないだろう。時代的には、有名刀工やその作品が広く顕在化し、また、徳川將軍家と各大名や大名間相互の贈刀が盛行する、江戸時代初期頃のことと一応仮定しておくことにする。

ともあれ、鬼切丸は最上家によつて明治初年まで大切に保存されてきた。足利支流斯波氏の流れを汲む最上家ならではの家柄と矜持がそうさせたのであろう。鬼切丸は同じ安綱の作でも童子切のような華やかさはないが、家門の象徴と相伝の歴史の重さを物語るものとして、まさしくもう一つの名刀であるに違いない。



重要文化財 太刀 銘 安綱(号鬼切) 京都・北野天満宮

史料紹介

仮称『最上義光注連歌新式』一冊

元最上義光歴史館
事務局長

片桐繁雄

【はじめに】

中世日本文学の権威、木藤才蔵博士から、昨秋山形市に貴重な写本が寄贈された。最上義光が注を書き入れた『連歌新式』である。

博士は、岩波古典大系『神皇正統記・増鏡』『連歌論集・俳論集』を担当なさって令名高く、また新潮日本古典集成『徒然草』は、名注釈書として広く江湖に迎えられている。周知のごとく博士は、連歌史研究において先人未到達の高峰に達せられ、その業績によって昭和四十九年に学士院賞を受賞された。たまたま同じ時の受賞者として、山形市名誉市民石坂公成博士がおられる。授与式の日、木藤・石坂両博士は一緒に天皇に御進講なされたのであった。

最上義光を高く評価しておられる博士は、平成十七年秋、本写本を義光の故郷山形市に寄付してくださったのである。

【体裁】

縦二七・七cm。横二一・二cm。袋綴じ。表紙柿渋塗り。題簽なく、外題を欠く。内題は、第二丁表第一行目に「連歌新式」とあり、上部に「最上院蔵書」の

縦型黒判を捺す。本文紙数六九枚。各丁表裏とも一〇行。漢字平仮名交じり、「ハ・ミ」など少数の片仮名を交える。一行の字数は不定。朱書きは末尾に「巴」を記し、里村紹巴記入であることを示す。巻末六八〇九丁に、義光の奥書及び、これに応ずる紹巴の奥書がある。(写真)

【成立年次】

義光奥書の日付「文祿五年七月朔日」と、紹巴奥書の日付「文祿五年初秋中旬」とにより、文祿五年(一五九六、改元慶長二)七月の成立。

当時紹巴は、前年の豊臣秀次事件に連座して近江流謫の身であった。義光も次女駒姫(おいまの方)を秀次の侍妾としていたため一時閉門謹慎を命じられたが、この時点では宥されていた。したがって、義光は秀吉から罪人として退けられた紹巴と、懇ろに音信を通じていたことになる。時に義光五十一歳、紹巴七十三歳であった。

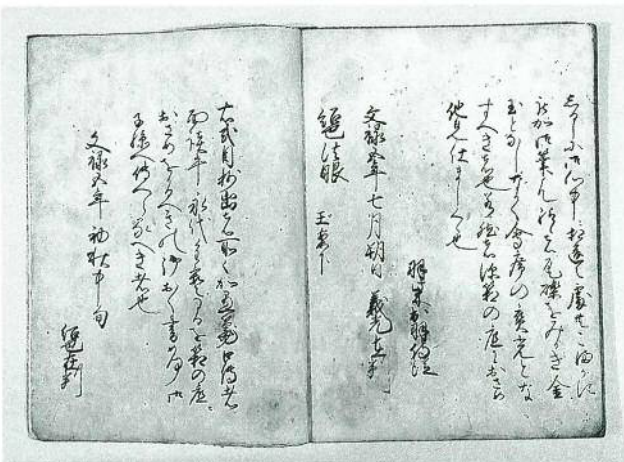
木藤博士は、本写本は江戸時代初期、寛永に溯る可能性ありと見ておられる。「最上院蔵書」の印は、寒河江市慈恩寺の最上院に伝来したことを示

す。北畠教爾氏によれば、明治の廃仏棄釈以後の流出と推定されるといふ。

【内容】

木藤博士著『連歌新式の研究』から引用させていただく。

「義光が在京中に諸処の会席に臨んで式目の運用に関して不審に思ったことを、その場の先達に質問したり、あるいは宗匠のさばき方その他から見当をつけたりしたことを、そのつど書き留めておいて、のちにこれを整理したものようである。……紹巴の書き入れは僅かで、秘事大事に属することは奥書にも記されているように口伝に依っているようである」(頁一五二)。



木藤才蔵氏寄贈の「最上義光注連歌新式」奥書

義光の奥書によれば、「毎座不審の儀ども八百ヶ条」を筆記したとあるが、現に見られる本写本は四百八十八ヶ条である。伝来の間に三百余ヶ条が脱落したのであろう。

【本書の意義】

既確認の義光の連歌三十三巻は、『最上義光連歌集』全三集として刊行された。その質的面的については、山形大学教授名子喜久雄氏が考察を加えておられるが、本書によって義光の文学的教養、連歌に対する熱意などが、さらに詳細に明らかになることが期待され、義光の人物研究にとって貴重な史料である。

義光個人の問題を離れても大きな意義がある。

桃山時代の連歌界で式目がいかに受容され、機能していたか、その実態と限界。連歌が陥っていた閉塞状態の解明。そこから脱却しようとする努力など、俳諧文学発生の様相を明らかにする上でも、本書は益するところがあるように考えられる。

また、戦国時代を切り抜けた遠国大名が文化形成に参与した事例としても、研究の好対象となるだろう。

他の写本が紹介されていない現在、本書はいわば天下の孤本である。上記のごとく大きな意義を有するものだけに、本書の公刊が期待されるところである。

折り紙に想う

日本折紙協会講師

大場祐子

最上義光の娘・駒姫は関白豊臣秀次のもとに側室として嫁していたが、夫秀次の失脚により、駒姫も故郷を遠く離れた京都の三条河原で悲運の死を遂げたという。その時駒姫は、十五歳であった。

現代の感覚では比較出来ないことなのかも知れないが、十五歳といえは、まだ親の許で、甘えたり、子女としての躰や教育を受けている年頃なのではないだろうか。当時の子供達はどんな遊びを楽し

んでいたのだろうか。武家の子と町人の子でも違うだろうか……。

私事であるが六十の手習いで始め、一枚の紙を折り、たたみ、することで、楽しい作品に作りあげる事が出来るのである。季節の行事や草花、子供に人気のキャラクター、飾るもの、動かして遊べるもの、胸元を飾るブローチ、くらしに生かせる実用的な小物。特に三月節句のお雛さま、五月の兜や武者人形、十二月のサンタやクリスマスツリー、お正月を飾る鶴や干支等は、毎年新鮮な気持ちで折り、人

に贈ったり、教えたりする事も楽しいものである。こんな折り紙を当時の子供達は折っていたのだろうか。

東京北区王子にある「紙の博物館」を見学した事がある。紙に関する資料の収集や保存展示を見学することが出来た。

紙は中国の四大発明の一つであり、歴史上最も古い記録は一〇五年と書かれている。

日本には聖徳太子が摂政のころの六一〇年朝鮮の僧の曇徴が紙の作り方を伝えたといわれている。これが最も古い記録である。折り紙では、伊勢皇太后宮の齊宮が手を加えた神宮用紙を用いて「鶴たず」の神事に基づき、鶴が折られたのが我国初の鶴折りであるといわれている。

七年前前だったと思うが、東京お茶の水の「おりがみ会館」の主催で、「日本のこころ、和紙人形・紙遊び展」が大阪阪急デパートで開かれた。その時、小林一夫館長のお手伝いをさせていただいたが、会場で伊勢神宮修験者の片山公寿氏との出会いがあった。その時片山山氏より伊勢古流に伝わる、たとう折りや、正六角形包みの指導を受けた事を思い出した。御幣や紙垂、又横綱の綱につける白い和紙等も神事とのかかわりの深さがわかる。



子供達と折り紙を折る筆者

俳句

古戦場の村

本沢俳句会顧問

枝松 杉月

注連にまづ火花散らして刀鍛冶

本丸へなだるるごととき花吹雪

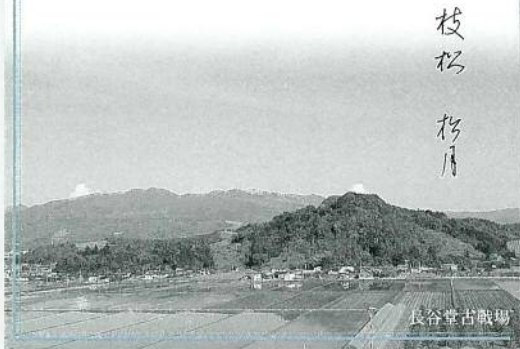
山城の名残り日陰の著莪の花

敵味方合祀の塚や十三夜

草紅葉血染めの色か古戦場

虎落笛関の声とも凱歌とも

(句歌集「雪間草」より)



最上義光歴史館の講座を受けて

岩田正太郎

ぼくは、去年の夏、最上義光歴史館でいろいろな講座を受けました。なぜ、受けたのかというと、ぼくは、日本の歴史が好きだからです。これまで三年生から夏休みに毎年、歴史館の講座に楽しく参加させてもらい、今回で三回目になりました。

今回の一つ目の講座は、最上家のゆかりの寺をめぐるというもので、龍門寺と常念寺と光禪寺に行きました。その中で、龍門寺と常念寺は、初めて行った所なので、とても感動しました。二つ目の講座は、これまでと違う新しい企画でした。それは、「さがす・うつす・はかる」という講座です。ぼくは、とてもおもしろそうだったので、わくわくしながら楽しく参加しました。それぞれどんな事をしたのかというと、まず、「さがす」では、かじよう公園の中にある石ひや植物を、さがして、見つけるということでした。見つけた石ひや植物の内容について、講師の先生から教えてもらいました。新しい発見もたくさんありました。次の「うつす」では、たくほんの道具を使って昔の鏡や鉄びんやかわらなどのようを、うつすとい



うことでした。また、昔の大きな石ひの文字もうつしました。どれもきれいにうつすことができて、今でも大切に持っています。そして、最後の「はかる」では、昔の重さの単位で当時そのままの重さをはかりを使って、自分の体重などを量りました。そのあとよろいを着て、体重計にのり、よろいの重さを量ったり、本物の刀の重さを量ったりしました。ぼくは、今回の講座の中で、このはかるが一番楽しかったです。理由は、昔の本物のよろいが着れたからです。ぼくは、よろいを見たことあるけど、着れるとは思ってなくて、テレビや本で見ただけで、着れるとは思ってなくて、見ためは軽そうだったけど、やっぱり重くて、特にかたによろいの重さがかかってちよっと痛かったです。ぼくは、歴史の中で特に戦国時代が好きですが、こんなに重いよろいを着て戦っていたなんてすごいと思いました。また、よろいを着たところの写真を、新聞に出たのを学級の先生から見せてもらいました。ぼくはその新聞を見ておどろいたし、とてもうれしかったです。あと、新聞社の人にお願ひして写真をもらうこともできました。大切にしたいと思います。

ぼくは今回、このような体験ができてよかったと思うし、とても楽しかったです。歴史がますます好きになりました。これからもこういう企画をもっと増やしてほしいなあと、思ったし、ぜひまた参加したいと思いました。

(山形大学附属小学校五年)

平成17年度事業

◆企画展 《4月5日～6月12日》

「よみがえる赤羽刀」～赤羽刀と収蔵刀剣
 展示総数14口(赤羽刀10口、収蔵刀剣4口)
 ギャラリートーク 5月4日・5日 講師/布施幸一先生

◆こども講座 《7月29日》

「最上義光公ゆかりの寺を訪ねるバスの旅」
 最上義光歴史館↓龍門寺(義光の父義光の菩提寺)↓常念寺(義光の長男義康の菩提寺)↓光禪寺(義光と二男の家親の菩提寺)↓最上義光歴史館 講師/片桐繁雄先生

◆こども講座 《7月30日、8月6日・20日》

「さがす!!うつす!!はかる!!」親子で歴史を学ぶ
 ・7月30日 さがす!!霞城公園を探索しよう!! 講師/石川藤男先生 高橋寛先生 於霞城公園
 ・8月6日 うつす!!模様をうつしてみよう!! 講師/軽部早苗先生 於最上義光歴史館
 ・8月20日 はかる!!重さをはかってみよう!! 講師/小関徳男先生 於最上義光歴史館

◆企画展 《9月17日～11月13日》

「掘る!!」～山形城三の丸ワールド～
 展示総数91件
 ・ギャラリートーク 9月19日、10月15日、11月12日 齋藤仁先生
 ・歴史講座「山形城三の丸調査でわかったこと」 10月30日 齋藤仁先生 於最上義光歴史館
 ・現地研修会「発掘された山形城を探して」 11月6日 須藤英之先生

◆歴史講座 《10月29日》

「史跡めぐり/最上家ゆかりの文化財をたずねて」
 最上義光歴史館↓金峯神社本殿・金峯山博物館↓羽黒山五重塔↓羽黒神合祭殿・鐘楼・出羽三山歴史博物館↓最上義光歴史館 講師/片桐繁雄先生

◆歴史講座 《1月28日、2月4日・18日、3月4日・13日》

「義光義姫政宗の手紙を読む」～手紙が語る真実のエピソード～
 講師/武田喜八郎先生 於最上義光歴史館

◆歴史講座 《2月25日、3月11日・25日》

「初心者のための日本刀講座」～武士の心と鐵の美にふれる～
 ・2月25日「日本刀の歴史と鑑賞の手引き」
 ・3月11日「武將と名刀」～伝説と由来～
 ・3月25日「郷土の刀工」 講師/布施幸一先生 於最上義光歴史館

◆最上義光歴史館こどもシアター 《3月19日》

「キラリ!!日本刀ってすごいぞ!!ルパンの仲間、ゴエモンが大活躍!!」
 「ルパン三世く燃えよ斬鉄剣」鑑賞会 於最上義光歴史館
 ・ホンモノの刀をみてみよう!!
 ・ホンモノのヨロイを着てみよう!!
 ・最上義光のカブトを折ってみよう!! 講師/大場祐子先生

平成17年度 事業スナップ



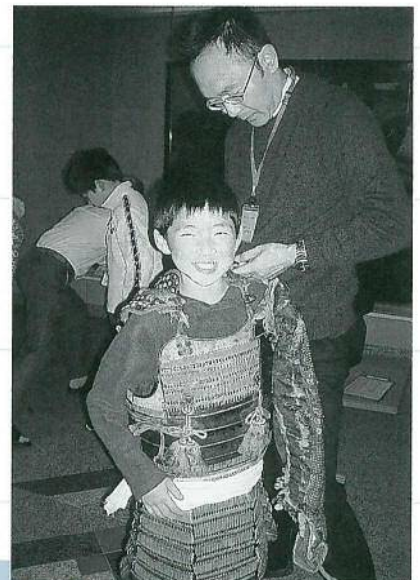
霞城観桜会(来賓として招かれた第47代当主最上公義氏夫妻)



史跡めぐり「最上家ゆかりの文化財をたずねて」
出羽三山神社の梵鐘



企画展「掘る!!」～山形城三の丸ワールド～
ギャラリートーク



ホンモノのヨロイを着てみよう!!



最上義光のカブトを折ってみよう!!



最上義光歴史館こどもシアター
「ルパン三世～燃えよ斬鉄剣～」

研究余滴^⑥ 最上家浪人作のベストセラ―

渋谷武士

へと申す物ハ、音ありて、手にもとられず、目にもみえず、色にもそまらず、火にもやけず、水にもぬれず、きつてもきられず、かくてハ、元来なき物かと思えば、腹中のときにより、いくつもある物にて候

初手から、「屁」の話とはいささか唐突で胡散臭い。でも、これはある男が、高僧との問答の結末に得心して出たことばなのだ。この可笑しいきさつ全文は、紙面の都合で割愛せざるをえない。「へくつ」とダジャレを飛ばしたくなるどころだが、この男は与太郎ではない。本文における作者の意図は、実はちがはぐで分かりにくい禅問答を擲しているのである。

これが最上家浪人のものした、「可笑記」なる仮名草子の巻第四(十一段)所載の一文である。ことほど左様に、全五巻の長短二百八十段にわたる内容は、当世批判や風刺、それに教訓に満ちていて実に面白い。また、多くの部分に現代にも通じるものがある。とりわけ、無能な主君や家老出頭人への痛烈で執拗な批判

は、およそ百二十数段にも及んでいる。

本書の著者は如曇子、本名齋藤親盛、慶長八年(一六〇三)頃に酒田に生まれたという。彼は最上家親に側近く仕え、元服時には主君から一字拝領している。だが、元和八年(一六二三)に重臣たちの愚かな政争によって最上家が改易、不遇な浪人生活余儀なくされる。前述のような批判は、作者自身のやり切れない憤りが心底にあつての表現と見られる。

各段のほとんどが「むかし去る人の云へるは」、またはこれに類する書き出しである。一見作者の意見でないように頼晦しているのが特徴。だが、和漢の故事を用い、それらをよく自己のものとして文中に生かしている。また、儒仏論・仏法論・経世論、それに小咄・雑話・笑話の類も多く、作者の博学ぶりと筆力のほどをうかがわせる。

本書は寛永十九年(一六四一)刊行されるや、たちまち評判になり、万治二年(一六五九)には絵入の本も出版された。また、浅井了意『可笑記評判』や井原西鶴『新可笑記』など、後続の作品に大きな影響を与えた。活字本としては、『仮名草子集成』第十四巻(一九九三年、東京堂出版)に所収されている。

平成18年度事業

■展示事業

(1) 企画展

「よみがえる赤羽刀」〜再び光り輝く郷土の刀〜
4月1日〜5月14日
山形市に譲渡された赤羽刀(GHQ接收刀剣類)の研磨事業完了を記念して全作品を一室に公開します。
(2) 特別展「日本の美を描く・平山郁夫展」
7月4日〜7月30日
平山郁夫画伯の作品によって、義光をはじめ武将たちが心の拠り所とした和の風景や、城・寺院などの文化財の美を再認識します。

(3) 企画展「新波兼頼入部650年記念展」

平成18年(2006)は、最上家初代新波兼頼が山形に入部してからちょうど650年です。その節目を記念して、兼頼の人物像と当時の山形の様子などを紹介します。

(4) 企画展「装演の美展」

12月中旬〜1月中旬
山形県表具内装組合と連携して、装演・表具の美しさと技術を紹介します。

■普及啓発事業

(1) 歴史講座「日本刀講座」

1月〜3月(5回)
日本刀の歴史や鑑賞の基礎知識、日本刀の構造や作刀の過程等を初心者にもわかりやすく解説し、日本刀の魅力を紹介いたします。

(2) 史跡めぐり

10月(1回)
県内の最上家や郷土の歴史に関する史跡等を現地研修し、現地に赴くことにより郷土史と文化財に対する理解をさらに深める一助とします。

(3) こども講座

8月(1回)
小学5・6年生を対象に、郷土の歴史に触れる機会を作り、郷土史に対する関心と理解を深め、愛郷心を育てるの一助とします。

(4) 「館だより」の発行

(年1回)
事業報告や考察、山形の歴史や最上家に関する最新の情報を広く一般に提供します。

(5) 最上家関係資料・史跡調査事業

最上家等に関する資料・史跡等の研究調査を進め、写真撮影等による記録保存及び複写等の資料整備を行うとともに、その成果を紹介いたします。

(6) インターネットによる情報の配信と企画事業

歴史館のホームページを活用して様々な情報を発信するとともに、ネット講座やキャラクター等の企画から物販まで幅広く展開していきます。

※詳細につきましては最上義光歴史館にお問い合わせください。

【表紙の資料】

双葉町遺跡(山形城三の丸跡)出土

「黒織部沓茶碗」 山形市教育委員会蔵
山形町の西方、現在の山形テルサが建てられている周辺から出土した遺物。ほぼ完全な状態で出土している。武人であり茶人としても有名な古田織部(一五四四〜一六一五)によって創始された織部焼の茶碗。その斬新な形状や文様から織部のすぐれた美意識がうかがわれる。発掘調査では、他に天目茶碗や志野茶碗などが出土している。これらは、57万石の大大名であった最上家の家臣の居住区からの出土である。栄華を極めた最上家臣団の華やかな暮らしを物語る貴重な遺物である。

ご利用について

開館時間 午前9時から午後4時30分
入館料 一般 大人300円 高校生200円
小・中学生100円(土曜日は無料)
団体(20名以上)大人240円
高校生160円 小・中学生80円
月曜日(国民の祝日となる場合はその翌日) 12月29日から1月3日
休館日 JR山形駅より徒歩約10分
大手町バス停留所より徒歩1分

来館案内図



平成18年3月発行
編集発行 財団法人山形市文化振興事業団
最上義光歴史館
〒990-0004 山形市大手町1-153
023-162517101
023-162517102
田宮印刷株式会社 印刷

<http://mogamiyoshiaki.jp>